

米同時多発テロのあと、 私のアフガニスタン暮らしが 始まった

安井浩美

共同通信社カブール支局通信員



2002年、アフガニスタン西部ヘラート市郊外にできた当時世界最大規模の避難民キャンプで窮状を訴える女性たち
写真提供：筆者（以下も同じ）



憧れのシルクロードへの旅が
すべての始まりだった

私とアフガニスタンとの出会いは、子どものころに見た『シルクロード』の番組に始まります。日本が経済成長を続ける1970年代、NHKが中国と共同で制作した番組を見た私は、雄大な景色にまるで映画を見ているような、ロマンたっぶりのシルクロードをいつか旅してみたいと夢見ていました。

短大の卒業旅行で初めてパスポートを取得し、2つ年上の友人と、いざ憧れのシルクロード、中国へと旅立ちました。シルクロードの出発点、西安からさらに西へ、新疆ウイグル自治区のトルファン、ウルムチへ。初めて触れたイスラム世界と文化でした。集団礼拝、人々の宗教観、イスラム食……。すべてが見たことも

触れたこともなかった空間に、シルクロードへの関心が一気に高まりました。もう、そうなたら止まらない。シルクロードをさらに西へ。イスラム世界が広がる国へと時間とお金を見つけては、旅し続けたものです。そして90年代。当時勤めていた会社を退職し、友人と二人で1年間のシルクロード横断の旅

へ出発しました。日本を出発、中国、タイ、ネパール、インド、パキスタン、イラン、トルコ、イタリアほか欧州各国、そして中近東、エジプトへ。アラブ世界へも足を踏み入れました。けれど、イラクは湾岸戦争の真つ只中、アフガニスタンはソ連撤退後の新たな内戦へと突入しており、一旦は日本へ帰国。そして、93年、ジャーナリストとなった私は、故フセイン大統領の誕生日を記念した報道向けのビザを運よく取得、アフガニスタンはジャーナリストビザを手に、まだ見ぬ両国へと旅立ちました。

**死んでいく難民の子どもたちを前に
人々の状況を伝える決意をした**

イラクは、91年の湾岸戦争の傷跡が各所に残り、バグダッド市内のアメリカンエルトアの空爆跡では、シエルター攻撃という、とんでもない惨事で亡くなった女性や子どもの写真が飾られ、涙が止まりませんでした。ほとんどの生活物資を輸入に頼っていた石油大国のイラクでは、経済制裁で輸入が禁止され物価が高騰、人々の生活は大変極まりないものでした。アフガニスタンでは、イラクをしのぐ貧しさを目の当たりにしました。今こそ、「難民」という言葉は一般的ですが、平和大国日本から来たジャーナリスト1



2001年11月12日、カブール入城を待つ北部同盟の兵士たち。1979年のソ連のアフガニスタン侵攻に、ムスリムのゲリラたちは「ムジャヒディン(聖戦を行なう者)」を名乗り抵抗。タリバン政権樹立後は北部同盟を結成し、戦闘を続けていた

年生には、難民の存在はかなりショッキングなものでした。

数十万人のカブールからの避難民を目前にして、何もできない自分の無力さに情けなくなつたものです。砂漠の地雷原の地雷を処理してつくられた避難民キャンプでは、日中50℃を超える暑さで体力のない子どもたちが脱水症状となり、医療や衛生状態の悪いなか、目の前で簡単に命を失っていくのですから。たくさん本の情報から、アフガニスタンにはラクダのキャラバンが存在すると確信し、テントで暮らす遊牧民を取材したいと思つていた私でしたが、まずこの人々の状況をジャーナリストとして伝えるべきと決意、遊牧民探しと並行し、アフガニスタンの内戦取材を開始しました。

その後、毎年のようにアフガニスタンを訪れては、出口の見えない内戦を取材しました。96年、タリバン政権が誕生してから、戦争の行方はますます見えなくなり、戦争の行方という結末をこの国は迎えるのだろうかと思つたものです。

パンジシールのライオンと呼ばれたアフメッド・シャー・マスード将軍。内戦中、誰よりも早く、テロリストの存在を指摘し、それに向かって戦う彼の姿を見るたびに、祖国を愛する真のアフガニス

タン人を目の当たりにしたようで、ますますこの国が好きになりました。

2001年、彼はアルカイダによつて暗殺されてしまいました。その数日後に起きた米国同時多発テロ。それに連動して始まつたタリバン掃討作戦。気づいたときには、アフガニスタンで共同通信社の臨時通信員として取材に当たっていました。

伴侶となる男性との運命の出会い。 この国で余生を過ごすことに

そして、カブール入城前日。私は北部同盟の戦車に乗り、チャリカールの町のパレードに参加しました。戦車に乗りながら、長かった戦争を思い出し、アフガニスタン人でもないのに祖国が解放されたように感じ、感慨深い思いになつたのを覚えています。

入城当日。5年ぶりを見る、北部からカブールへ向かう途中のシャモリ平原のあまりに変わり果てた姿に、昨日の喜びはどこかへ行ってしまいました。96年にタリバン政権がカブールを制圧して以来、ブドウの産地であるシャモリ平原は前線となり、ブドウ園は破壊され、多くの人々がタリバンとの戦闘で犠牲となりました。タリバン政権以前は、知り合いの農園に立ち寄っては、ブドウを食べたものです。

カブール市内入り口に当たるハイルハナ峠では、歓喜にあふれる人々を目にしました。「戦争は終わったんだなあ」とやはりうれしくなりました。

カブール陥落後、正式に共同通信社の通信員として働くことになった私は、いつしかこの国が自分にぴったりだと感じ、「ここで余生を過ごすのも悪くないな」などと、思うようになっていました。とても居心地のよい場所だったので。生活環境は、もちろん日本と比べれば劣悪ですが、すべてがゼロからの出発でこの国の成長や変貌ぶりをこの目で実感できるところが、ある種の快感なのかもしれません。

そして、02年、私の人生でヘビー級の運命の出会い、伴侶となるアフガニスタン人の夫との出会いがありました。実際1年、晴れて結婚した私は、本当にこの国で余生を過ごすことになりました。米国同時多発テロがなかったら、私の人生はまったく違ったものになっていたと思います。まさに、私の運命を、そしてアフガニスタンの運命を決めた同時多発テロでした。

避難民キャンプに学校を開設、 次は女性の生活支援が目標

アフガニスタンに暮らし始めて、来年



カブールの避難民キャンプにつくられたハズラト・モハマド小学校で、子どもたちに授業をするマラライ先生。最初の学校は戦争で廃屋となったサンダル工場内にあった

で10年目を迎えます。良くも悪くも、取材で通っていたころとは違った部分が見えるようになりました。思ったのは、やはりこの国には「教育」が足りないという事です。学校教育だけでなく、家庭内でも、子どもたちはいろんなことを学びます。しかし、この国では、「しつけ」すらもない家庭が多くあります。

戦争中、死んでいく子どもたちに何もしてあげられなかった私は、取材で訪れた避難民キャンプで、住民から学校をつくってほしいと言われ、これはいい機会と思い、キャンプのなかに学校を設立しました。「ハズラト・モハマド小学校」。子どもたちが名づけた名前です。バーミヤンからの戦争避難民が多くいました。戦後間もないころは、住民票を持たない避難民や帰還民たちは、政府の学校に子どもを入学させることはできませんでした。そこで、簡易の小学校をキャンプ内に設立し、学

校の建設費用（といっても教室ひとつですが）、机や椅子などの教材、先生の給与を私が負担することになりました。

ハズラト・モハマド小学校は、6年近く運営しました。その間、共同通信の仲間や、日本の個人ならびにNGOの皆さんからも多くの寄付をいただきました。多いときで300人近い子どもたちが、学校に通ってきました。年々、避難民たちも自立をし、最後には避難民キャンプが解散、私もそろそろ自立の時期と判断し、学校を閉校しました。

日本では、アフガニスタンは危険なところで復興もまったく進んでいないと思われている方も多いのではないのでしょうか。実際は、ゆっくり少しずつ復興しています。いまだに戦闘中の場所もあり、国家としてはかなり不安定だとはいえ、4半世紀の戦乱を乗り越え、人々がひとときの平安を手に入れ、祖国アフガニスタンで暮らしているのですから。日本も、もっと積極的にこの国に関与してほしいと思います。大国の間で政治ゲームに翻弄されたこの国で唯一、政治的野心なく、真の復興に携われるのは日本しかないと思っています。日本でも政権が交代し、今後の動きがアフガニスタンでも期待されています。

私の生活も最近では、快適なものとなり、閉校のあとは、世界遺産の大仏で有名なバーミヤンで女性の生活支援に取り組んでいます。何でも寄付に頼る「もらいぐせ」をなくし、自立した生活を送れるように、伝統工芸のひとつ、ハンディクラフトの製作にいそしんでいます。近い将来、ベトナムやタイのように、素晴らしい民芸品を世界に輸出できる日が来ることを願って。

もちろん、私の本業であるジャーナリストとしても、しっかりとアフガニスタンの新政権を見つめ、日本へニュースを発信したいと思います。そして、日本とアフガニスタンの友好の架け橋になればよいと思う、今日このごろです。

やさしいひろみ●1963年、大阪生まれの京都育ち。短大卒業後、アパレル会社に5年間勤務。雑誌編集事務所等を経て、フリーのフォトグラファーとして、93年からアフガニスタンを取材。2001年9月から同国に在住。著書に『私の大好きな国アフガニスタン』

大仏に上った筆者は、東大の足場をのりにつけて、民族衣装の女性工場の生活向上支援の工場で、刺繍を施されたもの

